Y32a 国立天文台アーカイブ室の活動 (3):日本最古の星野写真乾板の発見

○佐々木 五郎, 中桐 正夫, 大島 紀夫, 渡部 潤一, 縣 秀彦 (国立天文台)

アーカイブ室の活動として、約２万枚と想定される段ボールに収められた古い乾板の整理に着手しているが、その過程で、１９世紀末の麻布時代に撮影されたと思われる星野写真乾板を発見したので報告する。

日本で、天体観測に写真技術が応用されたのは、まだ感度が低かったこともあり、明治７年 (1874) の金星の太陽面通過現象が最初と思われる。乾板の感度の改良によって、諸外国では同時期に星野写真も撮影され始めていたが、これまでかつての東京天文台でも、いつ頃に夜間の天体観測に写真乾板が導入されたか、確かではなかった。今回、発見したのは、三鷹地区の旧図書庫に保管してあった段ボール箱に詰められた昔の星野写真乾板である。当時の写真は感度も悪く長時間露出しなければ暗い天体を写すことはできず、数日にわたり、6 時間以上露出した星夜写真乾板もあった。既に一世紀を経過しているので、膜面の状態も悪く、汚れや剥がれているものも多かったが、良好な状況の乾板の測定から、撮影した望遠鏡の焦点距離は 1270mm であることが判明した。これは、ちょうどブラッシャー天体写真儀の焦点距離と一致する。当時は、ブラッシャー天体写真儀は、鏡筒はあったものの赤道儀はなかったはずであり、別なものに同架して撮影したと考えられる。

本講演では、これらの古い乾板アーカイブの経過と、これらの最古の星野写真発見の経緯について報告する。